

北九州市立大学短期留学生の留学に対する評価

石川 朋子

(国際教育交流センター 非常勤講師)

キーワード

短期留学生、留学評価、質問紙調査、日本語、住居、チューター、人間関係、異文化

要旨

本稿は、短期留学生向け留学プログラムの改善に向けた示唆を得ることを念頭に、北九州市立大学短期留学生の自らの留学に対する評価について質問紙調査を行った結果を報告するものである。31名の短期留学生に「留学理由、満足度、日本人や日本社会に関して分かったこと、予想外だったこと、困ったこと、要望」について尋ね、記述式によって得られた回答をKJ法を用いて分類し分析した。各質問に対する回答を考察した結果、今回の調査対象者が「日本語、住居、チューター、人間関係、異文化」に関する事柄を留学評価時の指標として多く用いている様子が明らかになった。

1. はじめに

本稿は、北九州市立大学（以下、北九大）の特別科目等履修生（以下、短期留学生）の自身の留学に対する評価を把握するために実施した質問紙調査の結果を報告するもので、短期留学生の教育に携わる教職員間で調査結果を共有し短期留学生用プログラムの改善に向けた共通認識を得ることを目的とする。なお、本稿で報告する調査は短期留学生の留学満足度について調査した石川他（2020）の一部であり、本稿では北九大短期留学生の記述式回答についての分析を行う。

北九大の短期留学生向けプログラムは交流協定先機関からの学生を1～2学期間受け入れるもので、日本語能力検定試験N1合格者は学部向け日本語科目を、それ以外の留学生は短期留学生向けに編成された週7～8コマの日本語科目を受講する。両者とも日本文化科目を受講し、

英語で開講されている学部科目の受講も可能である。本稿の調査対象者はN1合格者ではない短期留学生向け日本語科目の受講生のみで、学部向け日本語科目受講生は含まれない。以下、日本語教育に関する言及は、学部向けのそれではなく、N1合格者ではない短期留学生向けの日本語教育に関する言及である。

2. 調査実施の背景

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）によると、日本国内の留学生総数は2017年度が267,042人、2018年度が298,980人、2019年度が312,214人と増加傾向にある。2020年度は新型コロナウイルス感染症（以下、新型コロナ）流行の影響を受け279,597人と減少したがこれは特異な状況であり、留学生総数の増加傾向は、新型コロナの行方次第とはいえ、今後も続くと推測される。短期留学生数も留学生数と同様の推移を見せており、2017年度が17,586人、2018年度が18,673人、2019年度が18,798人、2020年度が10,302人となっている。

日本国内の留学生の増加に伴い、彼らによる留学評価に関わる研究も増えているが、それらは正規留学生を対象としたものが圧倒的に多く、それに比して、非正規留学生である短期留学生を対象にしたものは多くはない。「短期留学生が増加し多様化する中、受け入れ側としては滞在期間の短さ、入れ替わりの激しさなどから対応に追われ、個々の留学生の留学生活への評価を大きくとらえることが難しいように思われる（石川他2020:270）」が、短期留学生の継続的な受け入れを考える場合、彼らによる留学評価に関する研究も蓄積していくべきであろう。

短期留学生による留学評価に関する研究のうち、本稿の調査にあたって参考にした研究のひとつが北澤（2011）である。北澤（2011）は、Z大学（仮称）が実施する短期留学特別プログラムの参加生8名にインタビュー調査を行った結果、調査対象者はプログラムに参加するにあたって①学術的知識を得る、②ことばを学ぶ、③日本人の友だちを作る、④新しい文化を経験するという4つの期待を抱いており、これらの期待が叶うと留学に満足する傾向のあることを明らかにした。また、留学の満足感に繋がるものとして、当初は期待していなかったが留学期間中に予想外に得たものの存在も指摘している。

正規留学生による留学評価に関する研究で参考になるものは多数あるが、ここでは玉岡（2002）と樋田他（2004）に言及したい。玉岡（2002）は広島大学の留学生750名を対象に行った質問紙調査の回答を因子分析した結果、「満足」を決める因子として①カリキュラムの適切性、②研究の進展、③よき友人、④文化適応が抽出されたと述べている。樋田他（2004）は東京工業大学の大学院留学生247名を対象に実施した満足度調査アンケートの回答を因子分析した結果、留学生の抱える問題として①収入源の確保、②困った時の対処方法、③人間関係の3つ

の要素因子が得られたと報告している。

今回の調査では上述の3つを含む26の先行研究を参考にし、質問紙に採用する質問項目を設定した。

3. 調査方法及び分析方法

3-1. 調査方法

先述の通り、本稿は石川他（2020）の北九大短期留学生の記述式回答を取り上げるため、調査方法は石川他（2020）に準じる。以下では北九大短期留学生の記述式回答に関わる事項を述べる。

今回の調査では質問紙調査を行った。調査実施期間は2020年1月から8月で、調査対象者は北九大に2018年10月から2020年8月の間に1～2学期間短期留学をした学生31名である¹。調査対象者の属性と人数を表1に示す。

表1 調査対象者の属性及び人数

性別	男性12、女性19
国籍	アメリカ3、オーストラリア2、韓国7、カンボジア4、タイ2、台湾2、中国6、マレーシア4、メキシコ1

質問紙は日本語で作成し、英語訳・中国語訳・韓国語訳を付け、調査対象者には、日本語・英語・中国語・韓国語のいずれかで回答するよう依頼した。質問紙はメール添付により配付し、回収には①メールに添付する、②郵送する、の2つの方法を用いたが、全員が①のメール添付を選択した。

質問項目選定の際には、まず、留学生活の全体像を見る視点を整理するため、正規非正規を問わず留学生による留学評価に関わる先行研究にあたり、26本の先行研究から留学評価に関わる73項目を抽出してKJ法（川喜多（2017））を用いて分類し、大学、生活、個人的・内的要因という3つの大分類を得た。更に、大分類「大学」は教育環境・支援体制という2つの中分類に、大分類「生活」は生活環境・大学外の活動という2つの中分類に、大分類「個人的・内的要因」は留学に対する内省・日本語能力・人間関係という3つの中分類に分類することが

¹ 2018年10月から2020年8月の間の短期留学生者は合計57名だが、連絡を取ることのできた39名にのみ質問紙を配付したところ、31名から回答を得た。回収率は79.4%である。

北九州市立大学短期留学生の留学に対する評価

できた。分類結果を表2に示す。

次に、中分類項目を全て含むことを念頭に質問紙に採用する具体的な質問内容を吟味し、記述式・客観式のいずれかで回答を求めるべきかも考慮しつつ確定した。以下は記述式回答向けの6つの質問項目である。

1. 北九大に留学した理由は何ですか。
2. 留学に対する全体的な満足度は100点満点で何点ですか。その理由を説明してください。
3. 日本人や日本社会に関してどのようなことが分かりましたか。
4. 留学当初は期待していなかったが、予想外に得たものはありますか。ある場合、書いてください。

表2 先行研究から抽出された留学評価に関わる項目

大学	教育環境	指導教員	指導教官	生活	生活環境	文化適応	新しい文化の経験		
			教官からの支援				異文化理解		
			教員の英語力				文化適応		
	教育体制	教育	教育方法			経済事情	日本の文化と習慣		
			評価方法		経済状態				
			授業		経済的支援				
			ゼミ		物質的・経済的サポート				
			カリキュラム		住宅事情	住宅事情	住宅事情	住居	
			プログラム		交通事情	交通事情	交通事情	交通事情	
			日本語教育体制	日本語予備教育	日本語教育の有効性			宗教	宗教
					授業		健康状態	健康状態	健康状態
			研究活動	研究活動・研究	研究室		大学の活動	健康状態	健康状態
					留学生の研究知識		アルバイト	アルバイト	アルバイト
	大学の施設	大学施設	学習・教育環境	個人的・内的要因	留学に対する内省	留学の動機	当該大学への留学の動機		
			周囲の英語力				教師・学生の英語力	留学理由	
	支援体制	サポート体制	サポート体制			留学への評価	学んだ知識		
			日々の活動に関する情報		自己評価				
			留学生センターの情報提供		予想外に得た(当初は期待していなかった)もの				
			大学への要望		留学経験が役立っているか/役立つか				
			大学教官からの支援		満足度				
			職員からの支援		大学				
			物理的・経済的サポート		大学生生活				
			大学からの支援		全体(留学生生活)				
			相談	相談相手	相談・助言			将来への展望	将来
					チューター制度	チューターとの接触頻度	日本語能力	日本語能力	日本語能力
			謝金に対する評価	人間関係	人間関係	人間関係	人間関係		
			チューターの資質			家族関係			
			チューターを通しての自己変化			友人関係			
			チューターとの人間関係			共同生活者			
			チュータリング内容			チューターとの人間関係			
			チューター制度の問題点			日本人との交流			
			チューター制度に対する満足度			人間関係における満足度			
	困ったこと	困ったこと	心配内容				研究室		

てください。

5. 留学中に困ったことは何ですか。良かったら教えてください。そのとき誰かに相談しましたか。
6. 北九大への要望はありますか。あれば、書いてください。

3-2. 分析方法

調査結果の分析にあたっては、まず、記述式回答を KJ 法を用いて分類し、各質問項目に対する回答の特徴を明らかにした。次に、今後の短期留学生向けプログラムの運営を考える上で参考となる回答を抽出し検討を加えた。調査対象者の回答のうち、中国語によるものは北九大関係者ではない中国語母語話者が、英語によるものは筆者が日本語に翻訳した。韓国語による回答はなかった。調査対象者の回答は原文、または翻訳通りに紹介することを原則とするが、個人や個別の事情が特定されることのないよう配慮した。また、語彙や文法等の誤用で文意が伝わりにくいものは筆者が適宜修正した。

4. 調査結果及び考察

4-1. 北九大に留学した理由

記述式質問項目1「北九大に留学した理由は何ですか」に対する回答を KJ 法を用いて分類した結果を図1に示す。図中の数字は、各分類に該当する記述数を表す。

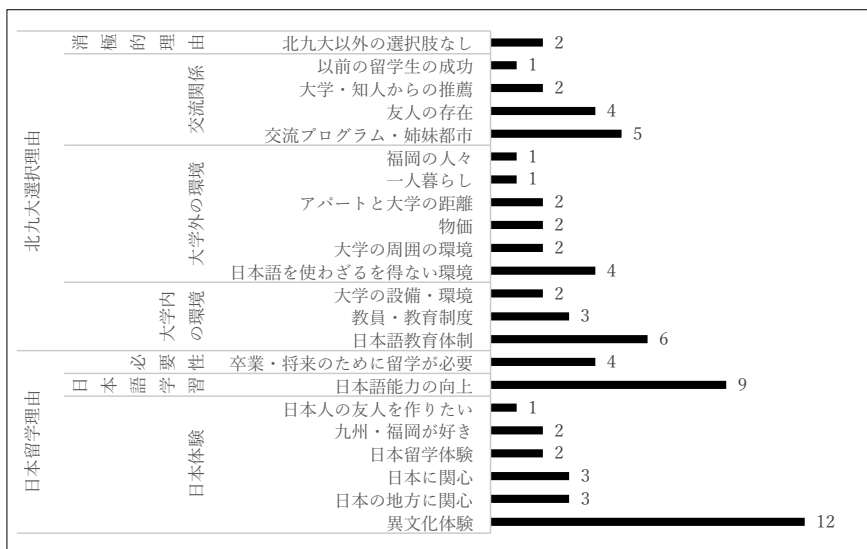


図1 北九大に留学した理由

図1より、北九大に留学した理由に対する回答は、「日本留学理由」²、つまり、北九大を選択したというより留学先として日本を選択した結果北九大に来たという回答と、「北九大選択理由」、つまり、日本の他大学ではなく北九大を選択したという回答の2種の大分類に分けられる。

「日本留学理由」を見ると、“異文化体験”（12記述）と“日本語能力の向上”（9記述）の多いことが分かる。調査対象者は日本へ留学したのだから、これはごく自然な回答と言えよう。“卒業・将来のために留学が必要”が4記述あるが、これは調査対象者のうち日本への留学が卒業要件となっている学生による回答である。

「北九大選択理由」を見ると北九大の特徴が浮かび上がる。“日本語教育体制”が6記述、“日本語を使わざるを得ない環境”が4記述と比較的多く言及されていることから、これらが積極的に評価されていることが分かる。“日本語教育体制”に関する回答を紹介すると「選択肢の中で北九大だけが日本語の授業が体系的に備わっているから(S20³)」、「北九大は日本語が上手ではない人にとっていいところだと聞いた。日本語の授業も多いし、実力によって適当な授業を受けられるのがいいと言われた(S18)」といったものがある。“日本語を使わざるを得ない環境”に関しては「あまり外国人がいない小さい街で自分の日本語を向上させることができると考えた。実際、多くの場合、日本語を話すことを強いられた(S16)」、「東京や大阪ほど国際化されていない街に住むことでより日本語を学ぶことができると考えた(S2)」等の回答が寄せられた。S16やS2の回答から、留学生の受け入れにあたり大都會の大学でないことが北九大の利点となると言えよう。

上述の“日本語教育体制”に加え、“教員・教育制度”、“以前の留学生の成功”、“大学・知人からの推薦”から、これまでの受け入れ実績がその後の受け入れに影響を与えることが示唆される。“以前の留学生の成功”には「過去の留学生たちは日本での時間を楽しんだように見え、〇〇大学（原籍大学名）の通常日本語クラスの学生よりずっと日本語が上手だった(S2)」という記述があり、これより学生が過去に北九大に留学した学生の成果を参考にして自らの留学先を決定している様子が見えがえる。過去の留学生の成果に着目しているのは学生だけではない。“大学・知人からの推薦”に分類された記述に「〇〇大学（原籍大学名）から日本語の実力を上げるには北九大が一番良いと聞いたから(S21)」とあるのを見ると、送り出し機関の教職員からも北九大の日本語教育体制は一定の評価を得ていると推測される。

また、アパートと大学の距離が近いこと、東京や大阪等より物価が安いこと、一人暮らしができること、そして、大学の周囲の環境（「自然に囲まれている北九州市が好き(S11)」／「観

² } } は大分類項目、[] は中分類項目、“ ” は小分類項目を表す。以下同。

³ S1～S31は調査対象者の識別番号を表す。

光地ではないが基本的な施設は備えられており勉強に集中しやすい (S21)』も北九大の強みとなっていることが分かった。

4-2. 満足度を規定する要因

図2は、2番目の質問項目「留学に対する全体的な満足度は100点満点で何点ですか。その理由を説明してください」の最初の問いの結果を示している。90点台と回答した者が最も多く、満足度はかなり高いことが分かる。

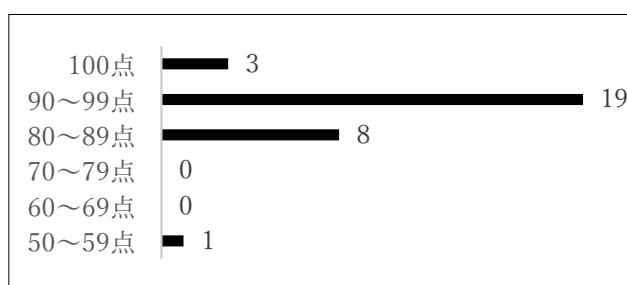


図2 満足度（100点満点）結果

図3に回答者が満足度の得点を決定した理由を示す。

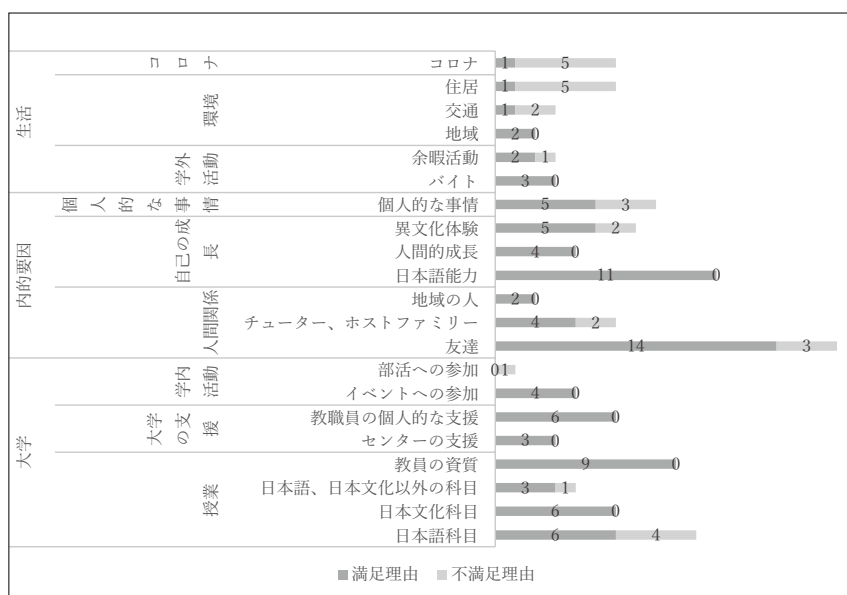


図3 満足度規定要因

図3で中分類項目に注目すると、満足度を規定する要因として、“日本語科目”や“教員の資質”、“日本語、日本文化以外の科目”等に関する〔授業〕が29記述、“友達”や“チューター、ホストファミリー”等に関する〔人間関係〕が25記述、“日本語能力”や“人間的成長”等に関する〔自己の成長〕が22記述と多く挙げられていることが分かる。このうち“日本語科目”、“日本語、日本文化以外の科目”、“友達”、“チューター、ホストファミリー”には満足と不満足両方の記述がある。それらの記述を以下に紹介する。

“日本語科目”ではレベル別・技能別クラスと少人数クラスに関して肯定的な評価が得られた。学生の回答を紹介すると、「北九大の日本語クラスのシステムは、各スキルのために十分な時間が設けられていて、完成度が高い (S16)」、「クラスもレベルによってよく分けられてあったし、文法、会話、漢字、作文等パートによって細かく学べたし、先生たちも非常に専門的な授業をしてくださったので良かった (S21)」、「クラス人数が少なかったので、日本語を話す練習がたくさんできた。また、クラス人数が少ないと、クラスのみんなが仲良くなりやすくなって、授業も楽しくなった (S10)」、「少人数クラスのお陰でより良く勉強できた。これは教員が適切なスピードで私たちを導くことができたためだ (S12)」といったものがある。北九大の短期留学生向けの日本語プログラムは初級から上級までの6コースがあり、それぞれのコースに総合教科書を用いて文法や語彙等を学ぶ総合日本語クラスと‘読解’‘作文’‘会話’‘漢字’といった技能別クラスが設けられている。また、各コースの学生数は多くても10名程度である。このような細かいクラス編成が学生に評価されていると言える。

“日本語科目”に関して否定的な評価は4つ認められた。その4つは、「ある授業は宿題が多すぎると思う。これはやらなくてもいいと思った宿題が時々あった (S19)」、「〇〇クラスのレベルが、時々他クラスに比べ低いと感じた (S2)」、「授業は少し易しい (S29)」、「一年間で習った知識は国内ほど多くなかった (S31)」である。現在、短期留学生日本語プログラムでは授業評価を実施していないが、授業評価を行い上述のような意見を授業改善に生かすべきである。また、学期末だけでなく学期中にも授業評価を実施したり、授業に対する不満を受け付ける機会を設けたりすれば、学期中でも修正が可能となり、学生の授業に対する満足度もより増すと考えられる。

“日本語、日本文化以外の科目”に関して肯定的な意見としては、「英語で行われる授業も受けられたから、いろんな学習ができた (S20)」、「〇〇大学(原籍大学名)に単位を持ち帰る必要がなく、好きな科目を取ることができたので楽しかった (S12)」といったものがあった一方で、「自分の専攻の授業が受けられない (S21)」という不満もあった。先述のように、短期留学生は英語で開講されている学部科目の受講も可能であり、それは高く評価されていると言えよう。しかし、各学部開講の専門科目の受講には一定の条件があり(北九大国際教育交流

センターウェブサイト参照)、S21のように自分の専門科目の受講に興味があってもそれが叶わない場合がある。このような条件が撤廃されれば、学びをより深める機会を学生に与えることができるのではないだろうか。

“友達”に関しては、「他の国の留学生と日本人の友達ができた (S25)」といった、国籍を問わず新たな友人ができただことに満足を示す記述が多かったが、「日本人の友達はあまりいない。だいたい留学生たちと仲良くなった (S11)」、「日本人学生との交流があんまりなかった (S20)」のように、日本に留学したにも関わらず日本人の友達ができなかったという記述も見られた。同様の意見は短期留学生の留学評価に関する先行研究にも見られ、例えば林 (2010) では留学生が留学中の日本人との交流の少なさを問題点として挙げたことが、福井 (2014) では日本人との交友関係が築けなかった留学生の回答が報告されている。また、中本他 (2007) は留学生と日本人との交流の不足を課題として挙げている。プログラム運営側は現在、歓送迎会やハロウィーンパーティーを催したりチューターやホストファミリーを紹介したりして留学生と日本人の交流機会を提供しているが、それでも日本人の友人ができないと言う学生がいることを念頭に、交流機会の更なる創出を考えなければならないであろう。

“友達”に関して「不満足」に分類されたもうひとつの回答を紹介する。S10は残念なこととして「日本人の友達が作れなかったこと」を挙げた上で以下のように述べているが、この背景には「日本人のグループ性 (グループで固まっていて、外から人をいれようとしないう様子) やオープン性の無さ (留学生に話しかけようとしないう、本音を話さない様子) (北澤 2011:76)」が指摘できる。

私は留学の最初はできるだけ交流会に参加して日本人の友達を作ろうと思ったが、話してくれる日本人がなかなかいなかった。とうとう日本人の友達が一人も作れないで帰国した。(S10)

“チューター、ホストファミリー”に関しては、

大学は私たちが早く環境に慣れるようにいろいろと手伝ってくれた。例えばチューターやホストファミリー。そのお陰で日本語の練習ができただけでなく、日本人とより良いコミュニケーションをすることができた。(S12)

といった肯定的な回答の一方で、「チューターの制度は遅いと思う (S11)」、「なぜ〇〇人の学生だけホームビジットがないのか (S30)」といった回答もあった。留学生は履修登録方法や

生活必需品の調達、様々な手続き等、特に来日当初に援助を必要とすることが多いため、チューターの配置は早ければ早い方が良いと考えられる。槌田他（2004:100）にも「チューターが生活の相談者としても機能するためには、留学生の渡日前にチューターの選定を行い、少なくとも来日直後の生活支援が必要な時期に支援活動ができるようにすべきであろう」とある。また、特定の国の学生にホームビジットの機会がなかったということだが、これには種々の事情があったと推測される。とはいえ、上述の感想を持つ学生がいることも事実のため、このような場合は事情をきちんと説明すべきであろう。

最後に、11 記述と多くはないが[環境]に関する回答を紹介したい。“住居”に関してはアパートが大学に近いことを評価する声があった一方で、部屋にゴキブリが出ることや太陽光が入らないこと、繁華街から遠く遊べるところがないことを指摘する声があった。また、“交通”に関する満足点としてはアパートから大学やスーパーまで歩いていけること、不満足点としては自転車が禁止されていること、交通費が高いことが挙げられていた。“住居”及び“交通”に関する不満点は後述の「予想外だったこと」に対する回答にも同様の言及が見られた。これら全てに対応することは難しいが、ゴキブリや自転車問題は改善の余地がある。自転車に関しては安全上の理由から禁止となった経緯があるが、自転車を認めれば学生の行動範囲も広がり交通費も減らすことができるため、再検討の余地があるのではないだろうか。

4-3. 日本人や日本社会に関して分かったこと

図4は、3番目の質問項目「日本人や日本社会に関してどのようなことが分かりましたか」に対する回答を分類した結果である。

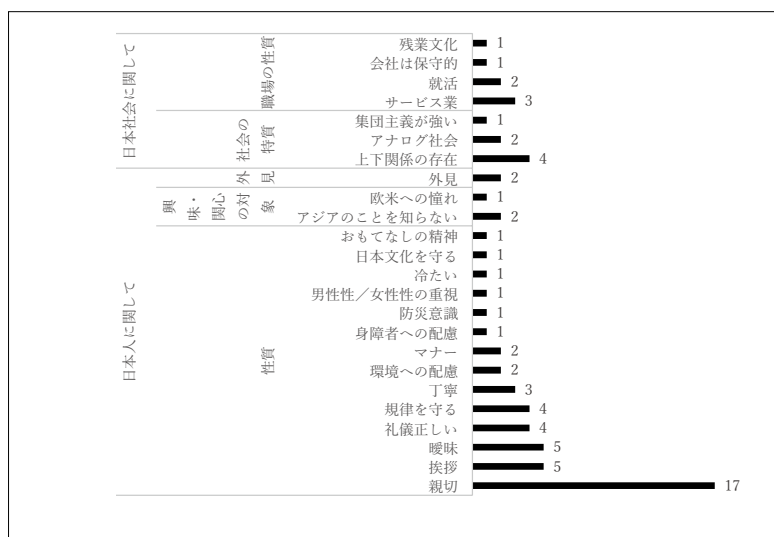


図4 日本人や日本社会に関して分かったこと

日本人に関しては“親切”という評価が17記述と最も多かった。以下に示す学生の回答からは、留学したからこそそれが実感できたことがうかがえる。

日本人は冷たいというイメージがあったが、留学でそうではない日本人の親切さを感じた。(S30)

日本に初めて留学した時が、私の国と日本の関係が良くなかった時期だったので、留学に行く前に少し心配したけど、皆親切で友達と日本人はすごく親切なのに、「どうして国家間の問題は悪い？」こんな話をした。(S23)

日本人に関して、3記述と数は少ないものの看過できない記述もあった。それは日本人の〔興味・関心の対象〕に関して、日本人がアジアに興味も知識もないことを指摘するものである。具体的な記述を以下に紹介する。

日本人は私の国（アジアの国）と日本の問題の歴史を学ばず、その問題に関心がなく、よく分からない。日本人が歴史問題に関心を持ってその問題について知れば、国家間の関係ももう少し改善されると思う。(S23)

アジアのことはあまり知らないようだ。例えば、「〇〇国（アジアの国）の首都の名前は何ですか」とか「〇〇国はアジアのどこにありますか」と日本の若者に聞いてみたら、半分以上の人が答えられないようだ。（交流会で）だいたいアジアの留学生は日本人の学生に無視されてアジア同士の学生と話す。(S10)

一方、日本人が欧米に対する興味や知識は持っていると感じた学生もいる。その学生は

私の経験から、日本の若者は欧米にとっても懂れるようだ。留学の1年間の経験から、自分が交流した北九大の日本人の学生は欧米のポップカルチャーに興味があって、欧米のことなら、何でも知っているようだ。歓迎会など日本人学生と留学生の交流会に行ってみたら、日本人学生が欧米の留学生に近づく光景が見られる。(S10)

と記述している。これらの回答より、日本人は欧米に対する興味や知識はあるがアジアに対するそれはあまりないと感じたアジア出身学生のいることが分かる。同様の指摘は八若（2018）

にも見られ、そこではインドネシア人交換留学生が「日本人学生の関心が英語を話す欧米人に向いていると感じ、日本人との交流は難しかった(八若 2018:41)」と述べている。日本人の興味・関心の対象はすぐに変わるものではないが、日本人はこのような留学生の指摘を真摯に受け止めなければならない。留学生と日本人と一緒に、なぜ日本人にそのような傾向が観察されるのかを考察する機会があれば、お互いをより理解する契機となるのではないだろうか。

日本社会に関して4記述と最も多く言及されたのは、自国と日本の上下関係の違いや年長者への言葉遣いの難しさを指摘する“上下関係の存在”だった。次に多く言及されたのは“サービス業”(3記述)で、日本のサービス業の質の良さについて述べられていた。

興味深いのは2記述あった、日本がアナログ社会だという指摘である。次のS23もS18も日本社会のアナログ的側面と保守的側面の関連性に言及している。

社会がアナログの感じ。そして日本人もそれに満足しながら変化を望むわけではなかった。日本社会と人々は保守的なようだ。(S23)

日本社会に関しては少し遅いというかアナログの感じがある。店とかで現金しか払えないところがかかりあった。もちろんカードで払ってもいいところもあったが、現金で払う日本人の姿をよく見た。また、市役所とかで整理券も機械ではなく、職員から直接もらったり、すごく時間がかかってもどかしかった。日本社会は変化するのをあまり好きではないという感じだった。(S18)

また、2記述あった“就活”には、就活生の服装が画一的なことは日本企業の保守性の現れとする意見があった。

4-4. 予想外だったこと

4番目の質問項目「留学当初は期待していなかったが、予想外に得たものはありますか。ある場合、書いてください」に対する回答の分類結果を図5に示す。

予想外だったこととして“人との出会い”が14記述と最も多く指摘された。ここでの「人」には日本人学生、他の留学生、教職員、ホストファミリーやバイト先の人といった地域住民が含まれる。「日本だけでなく他の国から来た友達に会えることは期待していなかった。彼らの文化も学ぶことができた(S2)」、「(予想外だったことは)違う国から来た留学生たちと友達になれたことだ。私にとって宝のようなものだ(S28)」といった記述からは、当初は期待していなかった、他の留学生との出会いが留学の成果のひとつとなった様子がうかがえる。次の

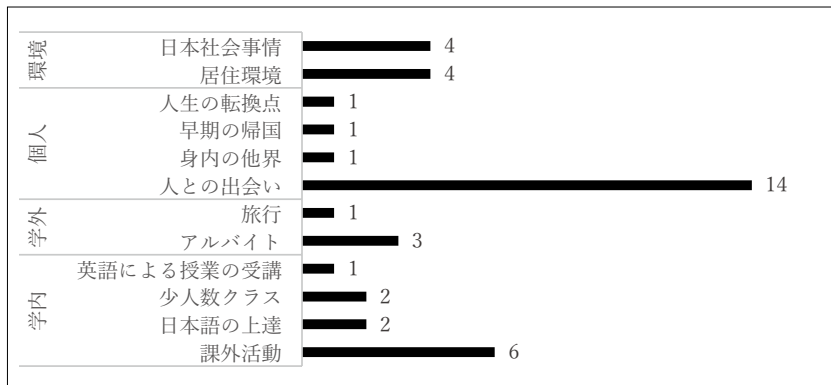


図5 予想外だったこと

S18は留学を通じて自身のコミュニケーションに対する考え方が変わったと述べている。この経験はこの学生の今後の人生に影響を与えるほど貴重なものだと考えられる。

私はそんなに期待しないで日本に来た。留学当初は外国人とは本当の友達になれないと思った。人間関係にとってコミュニケーションが一番重要だと思って、日本語が下手な私は無理だと思った。挨拶するのも恥ずかしくて、最初は私の国の人と遊ぶつもりだった。しかし、授業を受けながら日本語に少しずつ自信がついた。勇気をだして他の外国人と交わろうとした。その結果、いい友達がたくさんできて、一緒にお酒を飲んだり、お互いの家に招待したりした。留学が終わったが今でも連絡をする友達もいて、私の国で会ったこともある。この経験で私の偏見を捨てられた。(S18)

予想外だったことで、次に言及の多かったのが“課外活動”に関するものである（6記述）。良い経験として挙げられているのは大学祭での出店や日本人学生中心のゼミへのゲスト参加等である。一方、期待外れだったこととしては2つの記述が得られた。まずひとつ目の記述を紹介する。

大学のメインの学生との統合的な活動がよりあることを期待していた。留学生は隔離されたグループのように感じた。日本人の友人を作るのは容易なことではなかった。(S16)

先述したように、短期留学生は主に日本語プログラムに参加する。つまり、週に7～8コマの授業の多くは留学生のみのクラスである。そのためS16は自分達が隔離されたグループの

ように感じたのであろう。他機関で実施された調査にも「短期交換留学プログラムに在籍する大多数の留学生と日本人学生のコミュニティとは隔たりがある傾向が強い（恒松（2007:19）」という指摘がある。4-2節「満足度を規定する要因」で日本人の友達ができなかったという声を紹介したが、その原因のひとつはここにあるのかもしれない。今後、日本人学生との交流を可能とする活動、例えば協働学習を短期留学生向けプログラムにより積極的に取り入れるべきだと考える。こうした活動が留学生、日本人学生双方に資することは言うまでもない。隈本他（2006）においても「留学生たちは日本人学生との「教室でのインターアクション」を望んでおり、日本人学生にとっても留学生との「教室でのインターアクション」は「国際理解教育」という観点からも重要である（隈本他 2006:20）」と述べられている。

期待外れだったことに関する2つ目の記述はチューターに関するものである。

割り当てられたチューターは標準的な活動を提供してくれなかった。彼らがトレーニングの際などにどのように言われているかは知らないが、あるチューターは5分しか面談せず、あるチューターは週に2回会って本当の友達になっていた。私達双方にとって、時々それは退屈なつらい仕事のように感じた。別にそこにいたいわけでもないのに仕事のためにいなければならないからだ。（S16）

4-2節「満足度を規定する要因」ではチューターの配置が遅いという回答があったが、S16の回答はより深刻でありこのような事態を繰り返してはならない。チューター制度について考察した瀬口他（1999）では、チューター制度の問題点のひとつとしてチューターの役割の説明不足を挙げているが、同様の問題が北九大のチューター制度にも指摘できるのかもしれない。プログラム運営側は、今以上に、チューターにその役割を確実に伝え、活動の確実な履行を求めるとともに、問題が生じた場合、留学生もチューターもそれを関係部署に相談しやすくなるよう留意すべきだと考える。

“アルバイト”に関する言及は3つと多くないが、「日本語があまり分からないにも関わらずアルバイトの機会があるとは予想していなかった（S12）」という記述は、大学が紹介した、英語を使用して地域の高校生と交流をするというアルバイトが学生にとって良い経験になったことを示している。今後も、日本語レベルが飲食店や小売店等でアルバイトをする程まで達していない学生にアルバイトの機会が与えられることが望まれる。

“英語による授業の受講”に関する記述としては「英語の授業も受けて、日本の立場でよその世界を考えることができた（S27）」というものがあつた。先述の通り、短期留学生も学部開講の英語による授業を受講できるのだが、この学生はその経験を通じて日本のものの見方や

価値観を知ったようだ。この経験は日本をより深く理解したり、物事を多角的に分析する能力を付けたりするのに非常に重要な経験である。4-2節で学部開講の専門科目の受講ができないという学生の不満を紹介したが、短期留学生が英語による科目だけでなく専門科目の授業にも参加することができれば、上述のような気づきが多く得られ、彼らの留学の意義がより一層増すことになろう。

4-5. 困ったこと

5番目の質問項目「留学中に困ったことは何ですか。良かったら教えてください。そのとき誰かに相談しましたか」に対する回答の分類結果を図6に示す。

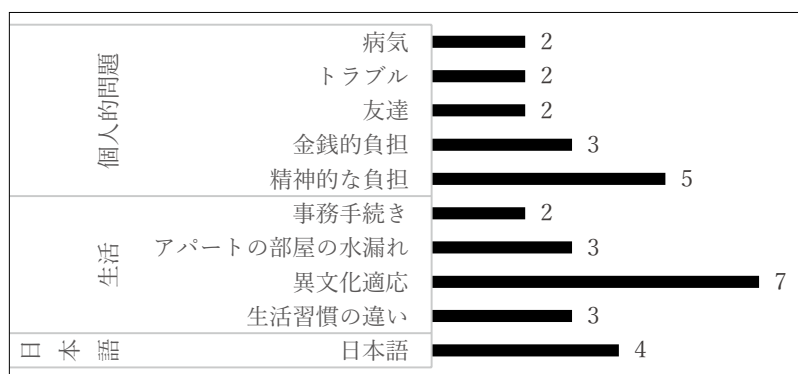


図6 困ったこと

留学中に困ったことを尋ねた際の回答として7記述と最も多かったのは“異文化適応”に関する回答であった。具体的な記述としては、食事が合わない、ゴミの分別が煩雑である、どこでどのような生活必需品を入手すべき分からない、といった声が挙げられていた。また、自国と違う静かな環境に違和感を持ったと訴える学生もいた。この記述は5記述と2番目に多かった“精神的な負担”にも通じる。“精神的な負担”では、時々ホームシックになったり、寂しく感じたりしたという回答も見られた。

4記述あった“日本語”に関しては、年配者の発話が聞き取れなかったり電話が苦手だったりした経験が寄せられた。また、日本語の授業についていくのが大変だったが、チューターに助けてもらったという回答もあった。

“金銭的負担”に関する記述は3つあり、ひとつは自国と日本の物価の相違に、後の2つは新型コロナ流行に伴う出費（帰国が難しくなり予定より長く日本に滞在することになった／帰国時に高額なフライトしかなかった）に言及していた。先に触れた槌田他（2004）では、留

学生の抱える問題として収入源の確保が挙げられていたが、今回の調査対象者の場合、新型コロナが流行しなければ、日本での生活に支障を来すような金銭的問題は少なかったと考えられる。

困った時の相談相手として挙げられていた人物を紹介すると、日本での生活や日本語の勉強に関することは教職員やチューターに相談し、寂しいといった精神的負担の解消には同国人に頼るという傾向が確認された。

4-6. 北九大への要望

図7は、6番目の質問項目「北九大への要望はありますか。あれば、書いてください」に対する回答の分類結果である。

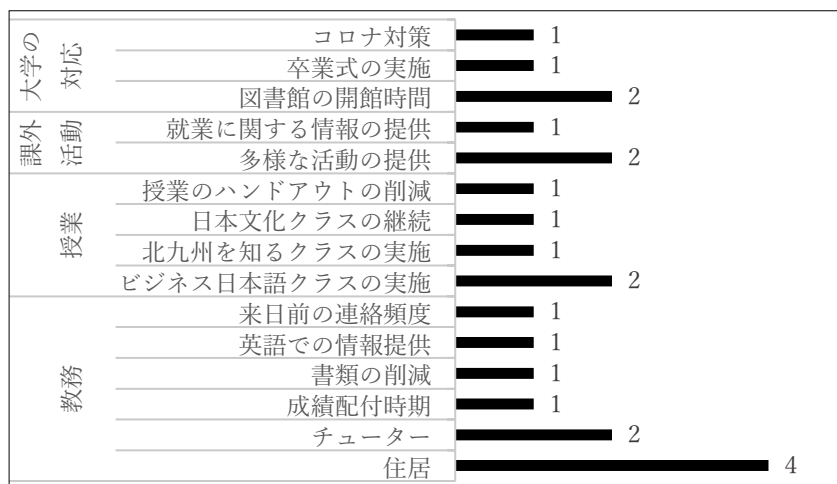


図7 北九大への要望

北九大への要望のうち、最も言及されたのが住居に関することであった（4言及）。そのうちの1つは契約に関するもの、残りの3つは部屋の管理に関するものだった。契約に関しては、部屋の契約に関する注意事項を教えてほしいとの要望があった。新型コロナのための帰国に伴い解約する際、家賃は同じなのに防衛料（敷金の返還に関するものと思われる）がマンションによって異なり戸惑ったということである。今後も何らかの理由でアパートを中途解約する学生は出てくるだろう。その際のトラブルを防ぐために契約時に解約のことまできちんと説明し、了承を得ておいた方がいいと思われる。

部屋の管理に関しては、入居時に前入居者の持ち物が残っていたり、部屋によって備え付けられている備品が異なったりしたという指摘があった。入居時の部屋の状態は公平であること

が望ましいと考えるが、前入居者が家具や電気製品を後輩のために残すなど、種々の事情も考慮に入れなければならない。手間のかかることではあるが、入居時には学生にこうした事情と各部屋の状態を説明すべきではないだろうか。また、大学が貸し出した電気カーペットが汚れていたという指摘があったが、大学が貸し出すものに関しては清潔にしておく必要がある。

2記述あった項目のうち、ここでは“多様な活動の提供”、“ビジネス日本語クラスの実施”、“チューター”に関する要望を紹介したい。

まず“多様な活動の提供”についてだが、英語圏出身の学生の回答に以下の記述があった。

留学生が互いに知り合いになれるような手伝いをしてほしい。他国からの学生、特に英語学生を知るのを躊躇しているように見える人もいた。(S4)

このS4は、非英語圏の留学生との交流に困難を感じたようだが、交流がうまくできるかどうかには個人差がある。4-4節「予想外だったこと」で他国から来た留学生との交流を肯定的な出来事として挙げた学生には英語圏の学生も非英語圏の学生も含まれていることから個人差のあることが分かる。ただ、4-4節で紹介した非英語圏の学生であるS18が、日本語が下手で外国人と挨拶するのも恥ずかしかったと述べていることから、自らの日本語能力への自信が他国の留学生との交流を妨げる要因のひとつとなることが示唆される。プログラム運営側は授業や様々なイベントにおいて留学生同士の交流の機会を既に提供しているが、今後はS4やS18のように留学生同士の交流に困難を感じる学生により一層配慮し、そうした学生が少しでも交流しやすくなる方策を考えたい。具体的には、言語を介さないゲームや仲間と協力して課題を遂行する活動、話すことが必須のペアワーク等を取り入れるといいのではないだろうか。

“多様な活動の提供”に関するもうひとつの記述を以下に示すが、この記述は自己が経験した活動内容を高く評価している。

今までのように留学生にとって多様な活動ができる環境を作ってほしい。次の留学生たちも現地ならではの思い出がたくさんできる留学生生活を過ごせるようお願いしたい。(S22)

“ビジネス日本語クラスの実施”という要望に関しては、単に「ビジネス日本語クラスがほしい」という意見の他に、以下のような具体的な希望も示されていた。

日本語を勉強する留学生、特に日本語・日本学を専攻している留学生は日本企業に就職を希望する人が多い。自己分析の仕方や企業へのメールの書き方などを学ぶ授業があれば、そういう学生達に役に立つと思う。(S10)

これに関連して、“就業に関する情報の提供”という要望に、

もし日本で就業したい学生がいれば、外国人の就業に関する情報とかを教えてくださいと留学生は助かると思う。(S18)

という記述もあった。この記述はビジネス日本語の授業内容にも通じるものである。現時点では、短期留学生向けのビジネス日本語クラスは実施されていないが、開講を検討すべきではないだろうか。

“チューター”に関して提示された2つの要望のうち、1つは「最初の日からチューターを準備しておいてほしい」という要望である。これは、4-2節「満足度を規定する要因」にあったチューターの配置が遅いという記述に重なる。ここで「最初の日」は来日日、または、授業開始日を指すと考えられるが、いずれにしても現行より早い段階でチューターを必要とする学生がいることが分かる。

チューターに関するもうひとつの要望を以下に紹介する。

チューターは積極的に留学生と活動をする人がいるが、待ち合わせに来ないとか、本当はチューターになりたくないがお金がもらえるのでアルバイトとしてチューター活動に参加する人もいる。こういうような人と活動することになった留学生は辛かった。留学の間の悪い思い出にならないように、チューターが要るのか、要らないのか、選べればいいと思う。(S10)

4-4節「予想外だったこと」でもチューターによって活動実態に違いのある様子が見えたとしたが、同様のことが上の記述からも言えるであろう。繰り返しになるが、関係部署はチューターが責任を持ってチューター行為を行っているかどうかを今より厳しく確認すべきであろう。また、留学生もチューターも相手に不満がある場合は教職員に相談できる体制作りも必要だと思われる。

最後に、1記述のみであるが示唆に富む指摘である、“英語での情報提供”と“北九州を知るクラスの実施”について述べる。“英語での情報提供”についてS16は、

日本語がよく分からない人のために英語でも情報が提供されるべきだ。80%は日本語のみだった。(S16)

と述べている。短期留学生には、先述の通り、初級から上級までの各レベルの学生がいるが、初級から中級前半の学生にとって日本語のみの情報を理解するのは非常に困難であることは容易に想像できる。いわゆる「やさしい日本語」や多言語による情報提供を実現すべきであろう。

“北九州を知るクラスの実施”に関しては、「北九州の歴史や文化を学ぶ授業があればいい(S10)」という意見があった。留学生が留学先の地域について知りたいと願うのはごく自然な要求と思われる。単発でもいいので北九州について紹介する授業を設けたり、北九州について調査させる課題を与えたりすれば、学生のこのような要求に応えることができると考える。

4-7. 各質問に重複して出現した回答：まとめにかえて

6つの質問に対する各回答のうち5つの質問に重複して出現した回答は「日本語」と「住居」に関するもので、共に留学理由、満足度規定要因、予想外だったこと、困ったこと、要望に関する質問の回答に言及されていた。「チューター」に関しては満足度規定要因、予想外だったこと、要望の3質問の回答に、「人間関係」に関しては満足度規定要因、予想外だったこと、困ったことの3質問の回答に、そして「異文化」に関しては留学理由、満足度規定要因、困ったことの3質問の回答に言及されていた。回答として繰り返し出現するということは調査対象者の関心の高さを現すと推測できることから、「日本語、住居、チューター、人間関係、異文化」に関する事柄が、今回の調査対象者が自らの留学を評価する際の指標となっていると言えよう。

5. 今後の課題

本稿では北九大の短期留学生を対象に実施した質問紙調査の結果を報告したが、新型コロナウイルスの影響は考察していない。というのも、2019年10月の質問紙作成時点では新型コロナがまだ発生していなかったため質問紙に新型コロナ関連の質問が入らなかったからである。調査対象者には新型コロナウイルスの影響を受けた者もあり、彼らの回答にはそれに関するものもあるが、影響を受けた者と受けなかった者が混在する中で新型コロナに焦点を置いた分析を行うことは不適切だという判断もあった。しかし、新型コロナが留学に与えた影響は今後調査すべきであろう。北九大は新型コロナ発生以降も遠隔授業による短期留学生受け入れを継続しているので、次は遠隔授業に対する留学生の評価を調査し、新型コロナの影響に着目して分析を行い、その結果をまだ暫く継続する可能性のある遠隔授業の改善に役立てたい。また、これまでに確立した遠

隔授業の体制を新型コロナ収束後も活用できるかどうかについても検討したい。

引用文献

- 石川朋子、上野まり子、アブドゥハン恭子 2020 「短期留学における留学満足度に関わる要因」『韓国日語日文学会 2020 年冬季国際学術大会発表論文集』 270-274
- 川喜多二郎 2017 『発想法 改版 - 創造性開発のために』 中央公論社
- 北九州市立大学国際教育交流センター「受け入れプログラム」 <http://international.kitakyu-u.ac.jp/inbound> (閲覧日：2022 年 1 月 2 日)
- 北澤美樹 2011 「留學生生活への期待と満足：短期留学特別プログラム参加生の声」『待兼山論叢』 (45), 65-82
- 隈本・ヒーリー順子、長池一美 2006 「大分大学短期交流プログラム (IPOU) の現状と今後の展望：大学教育の国際化推進に向けて」『大分大学留學生センター紀要』 (3), 13-22
- 瀬口郁子、田中圭子 1999 「チューター制度の運用に対する提言 - 満足度と教育的効果の観点からの一考察」『神戸大学留學生センター紀要』 (6), 1-17
- 玉岡賀津雄 2002 「資料 満足度調査の報告と多目的留學生支援調査の構想 広島大学留學生センター主催 講演・討論会発表資料」『広島大学留學生教育』 (6), 27-47
- 榎田和美、林高行、廣瀬幸夫 2004 「理工系大学院における留學生施策への提言 - 2002 年東京工業大学留學生満足度調査アンケートの分析より」『留學生教育』 (9), 95-112
- 恒松直美 2007 「短期交換留学プログラムの英語で行われる授業：自己と異文化適応」『広島大学留學生教育』 (11), 9-23
- 独立行政法人日本学生支援機構 (JASSO) 「外国人留學生在籍状況調査」
<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseki/> (閲覧日：2022 年 1 月 2 日)
- 中本進一、比奈地康晴 2007 「埼玉大学 STEPS の分析：国際教育交流論の視点から (下) ネットワークの検証と意義 < 論考 >」『国際交流センター紀要』 (1), 49-60
- 八若壽美子 2018 「インドネシアで働く元交換留學生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究』 (1), 29-43
- 林奈緒子 2010 「研究プロジェクト 短期留學生の日本適応能力向上についての研究 短期留学経験者の職場での日本語使用および過去の留学に対する評価」『東西南北：和光大学総合文化研究所年報 2010』 114-133
- 福井孝三 2014 「教育実践報告 短期留學生の大学生生活満足度：質問紙による留學生生活実態調査から」『外国語教育：理論と実践』 (40), 115-128